

マハーヴェーラの業説

長 崎 法 潤

一

ジャイナ教の聖典によれば、ジークヴァ (jiva, 活命・生命、靈魂、精神原理) は、それ自体、完全なる見 (darśana, darsana) 、智 (jñāna, jñāna) 、力 (vīrya, vīrya) 、楽 (sukha, suha) を有するが、このようなジークヴァの本性が自由に発現するのは解脱に到達した聖者においてのみである。外界にはカルマ (karma, 業) になりうるブドガラ (pudgala, 物質) が充満していて、ジークヴァが身口意の動作 (yoga) を起すと、それにしたがって、ジークヴァの中にその物質が入りこみ、附着する。これを漏入 (āśrava, āśraye, āśave) と称する。ジャイナ教徒が業と呼ぶのは、身口意の動作の結果ジークヴァに附着したこの物質のことであり、そのためにジークヴァの本性が覆われ、縛 (bandha) が生ずる。したがって、ジャイナ教説によれば、業が輪廻転生の原因となる。ジャイナ教聖典では、

「無始の輪廻に於いて、諸の業は種子たり。」^①

「総ての有身のもの (savva-dehin) の輪廻に於いて涅槃せざるは業を根とす。諸の苦は業を根とし、生はまた業を根とす。」^②

と説かれているのは、そのためである。

それでは、このような迷いの生存から脱し、解脱するには、どのような方法があろうか。附着した業の束縛からジューヴァが脱するとき、その本性が現われる。それ故、正しい宗教生活によって新たな業が入るのをくい止め（すなわち遮 *saṃ-vara*）、すでに入った業を苦行（*tapaḥ, tave*）によって滅しなければならない。これを滅（*nirjara, nijara*）といい、これによって解脱（*moksa*）が得られる。

ところで業は、道徳的善行によって得られる場合が福德（*Punya*）であり、悪行による場合悪（*paṇa*）であるが、両者とも輪廻の因である。ジューヴァと結びついて輪廻転生を続けるのは、業身（*kārmāṇasāritram, karmagāraṇaṇ*）という物質からなる微細な身体である。さらに物質としての業は、ジューヴァの本性を阻害するもの（*ghāti-karma*）と阻害しないもの（*aghātikarma*）との二つに分けられる。前者には *jñānavaraṇiṇya*（智の覆）^③、*darśanā-varaṇiṇya*（見の覆）、*mohaṇiṇya*（愚痴）、*antarāya*（障碍）の四種を数え、後者には *vedanīya*（苦楽の感受を起すもの）、*āyusya*（寿命を決定するもの）、*nāma*（個性を作るもの）、*gotra*（種族を決定するもの）の四種があり、合わせて八種となる。この八種の業はさらに細分され、全部で一五八種となる。

以上述べたジャイナ教の業説は、ジャイナ教の聖典にもとづく伝統的な解釈である。したがって、ヨーロッパやインドの学者がジャイナ教の業を論ずる場合、ほとんどこの伝統的業説を述べている。もちろんジャイナの業説には、その分類に主眼がおかれ、思想的展開がなされなかったからであり、原始聖典に見られる業説は、ジャイナ教の開祖マハーヴィーラの業説と根本的に大差がないと考えられるからである。たしかに、*Uttarādhyaṇa* に説かれている業論も、*Bhagavatsūtra* におけるそれも、*Karmagrantha* で論ずる業も、その本質における教義上の展

開は見られず、後期になるにつれその分類を詳しく述べ、枝末的な発展しか認められない。したがってヨーロッパ及びインドのジャイナ学者がジャイナ教の業説を論ずる場合、業の伝統的解釈と詳しい分類を主題とするのが一般の傾向である。

伝統的業説とは大きな相違はないとしても、ジャイナ教祖マハーヴィーラは、業をどのように説いたであろうか。ジャイナの原始聖典には、古い資料とともに新しい資料も混在しているので、新古を区別するのがなかなか困難であるが、そのうちでも最古と考えられる *Suyagada* (*Sutrakīṭāṅga*) 第一部と *Ayāraṅga* 第一部、さらにそれに つづいて古い部類に入る *Isibhāṣiṃ* とか *Dasaveyāliya* においても、伝統的解釈で云われるような業説が具体的に説かれておらず、もっと素朴なたちで業を語っている。したがってマハーヴィーラの業説を考察してみることが無駄ではなからう。

われわれは業を行為とか生活とか考える佛教の業説に慣らされているためか、業を物質とする教義に対し異質なものを感じる。さらにその業は、身口意の行動 (*yoga*) によって引寄せられた物質である場合、業は行為ではなく、行為の余勢がジークヴァに附着したすがたである。何故に行為によって生ずる物質を業と呼び、身口意の行動を業と云わず、*yoga* という言葉を用いたのか。後の註釈家は *yoga* をジークヴァの振動 (*parispanda*) であると解釈しているが、^④何故にそのような解釈が生じたのであろうか。これらの問題点を含め、マハーヴィーラの業説を論ずることにしよう。なお、ジャイナ教の伝統的業説に関しては、別の機会に詳しく論ずることにする。

註

- ① *Isibhāṣiṃ* II, 5 W. Schubring: *Isibhāṣiṃ*, Ein Jaina-Text der Frühzeit, Nachrichten von der Akademie

der Wissenschaften in Göttingen Philologische-Historische Klasse, 1942 Nr. 6 und 1951. 松澤誠廉「聖仙の語録」(九州大学文学部四〇周年記念論文集) 参照。

② *ibid.* IX, 1.

③ 宇野淳教授によれば、クンダクンタのみは、業論に独創的見解を展開せしめていることを明らかにしている。(宇野淳「ジャイナの業論」日本佛教学会年報)。

④ W. Schubring: Die Lehre der Jainas, S. 113 f.

二

原始佛教經典にはニガンタ・ナータプッタ(Nigantha Nataputta)の業説が数ヶ所に見出される。ニガンタ・ナータプッタはジャイナ教の開祖マハーヴィーラ(Mahāvira)を指すことは言うまでもない。^①ニガンダ(離繫)とはかれ以前にあった裸行の一派の名称であり、その派からジャイナ教が展開したといわれる。ナータプッタはナータ族の出身者を意味する。かれは積尊と同時代の人であり、積尊とはほぼ同じ地方で布教活動を行なっている。したがって阿含ニカヤには、同時代のライバルとして、ジャイナ教徒に關説するところが数多い。業に關する場合、主にマハーヴィーラの業説を批判するために引用されているが、その伝えるところは佛教徒によって歪められた学説ではなく、信憑性があると考えられる。

それではニガンタ・ナータプッタの業説を、まず増支部七四(二二〇～二二三頁)から引用することから始めよう。場所はヴァイシャリーである。リッチャヴィ族のアバヤがアーナンダ(阿難)に次のように語った。

「大徳よ、ニガンタ・ナータプッタ(離繫若提子)は一切智者(sabbhantu)、一切見者(sabbhassavī)なり、

すべては前に作られたものを因とする、と記されていることが注目される。これと全く同じことが増支部三・六一にも説かれ、それに相当する漢訳中阿含第十三経では、「人所為一切皆因「宿命造」となり、いわゆる宿作因説と言われ、釈尊は、そのような業説においては意欲も努力もないとして批判している。^④

さらに先に引用した中部一〇一天臂経では、次のようにも説かれている。

「諸賢尼乾よ、汝等前世に悪業を為した。それをこの烈しい難行によって壊滅せよ。また今ここに身をもって防護し、口をもって防護し、意をもって防護すれば、それは未来において悪業をなさしめない。このようにして苦行によって諸々の古い業を破壊し、——〔中略〕——一切苦が尽くるであらう。」^⑤

中部十四「苦蘊小経」^⑥においても同一の説が見出されるが、すでになした行為によって生じた悪業を苦行によって滅し、未来に悪業をなさしめないために身口意による防護を勧めたものである。ここで注意すべきことは、身口意を業と呼んでいないことである。

註

- ① ニガンタ・ナータプッタは六師外道の一つに数えられている。雲井昭善「佛教興起時代の思想研究」(平楽寺書店)参照。
- ② AN I, p. 220-221.
- ③ MN 101 (III, p. 214).
- ④ 舟橋一哉博士は「これについてすでに指摘しておられる。舟橋一哉「業の研究」(法蔵館)二〜三頁。
- ⑤ MN 101 (III, p. 218).
- ⑥ MN 14 (I, p. 93).

三

以上によってニガタン、ナータプッタに帰されている業説がほぼ明らかになったが、さらにそれを検討するために、ここに整理してみよう。

[1] 苦行によって古い業を破壊し、新しい業をくい止めること。

[2] 業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅↓〔解脱〕

[3] 樂、苦、不苦不樂を感受するのは、すべては前に作られたものを因とする（宿作因説）。

[4] 過去の行為の結果生じた悪業を苦行によって滅し、未来に悪業を生じさせないために身口意による防護をする。

われわれがこれから行なおうとする作業は、以上のニガンタ・ナータプッタの業説が、はたしてジャイナ教の古層聖典に説かれているか否かを調査し、もし一致する説が見出されるならば、新古の資料が混在するジャイナ教聖典の中において、その部分はマハーヴィーラの説に近いはずである。このようにして、両資料の一致するところを集めれば、ジャイナ教の初期の業説がある程度知られるはずである。

(1)

まず最初に〔1〕から検討することにしよう。古い業 (putaṇaṇa kammaṇa) とは、過去になした行為の結果ジールヴァの周囲に附着した業であると理解してよい。新しい業 (navanī kammaṇa) とは、未来に行為をなした場合漏入す

る業である。だからジークヴァに附着した業は苦行によって破壊されなければならない。新しい業が入ってこないためには、くい止めなければならない。それでは、パーリ佛典に伝えるこのようなジャイナの業説は、古層に属するジャイナ聖典ではどのように説かれているであろうか。ダサヴェーヤリーヤ・スッタでは、

「自制と苦行とによりて、過去の諸業を滅し終りて、成就の道に達せる守護者等は、涅槃す。」^①

さらに Uttarādhyaṇa では、

「苦行によりて業を滅す。」^②

「行爲を捨て無行動を得る。行動をなさずして新しい業を得ず、前になした業を滅す。」^③

以上によつて、「苦行によつて古い業を破壊し、新しい業をくい止める」という原始佛敎經典に伝える業説が、古層に属するジャイナ聖典に記されているところと一致することが明らかになった。原始佛敎經典では、ジャイナの業説に言及するとき、これは常套語になっていることからして、ニガンタ・ナータプッタの業説を正しく伝えたものであると見て間違いないであらう。

(2)

次に第二番目の〔2業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅↓〔解脱〕をとりあげよう。これもニガンタ・ナータプッタの業説を述べるとき、必ず用いられる常套語である。ところで、最初に引用した増支部七四(二二〇頁)に相当する漢訳雜阿含二十一では次のように記している。

「行苦行、故悉能吐之、身業不作断截橋梁、於未來世、無復諸漏、諸業永尽、業永尽故、衆苦永尽、苦

永尽故究「竟苦辺」^④

さらに、すでに引用した中部一〇一「天臂経」(三卷二四頁)に相当する漢訳中阿含第十九「業相应品尼乾经」第九では次のように記している。

「謂人所受皆因本作、若其故業因苦行滅、不造新者則諸業尽、諸業尽已則得苦尽、得苦尽已則得苦辺」^⑤

すなわち、パーリの原始經典に見られる「業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅」に相当する常套語は、漢訳では共通して「業尽↓苦尽↓苦辺を得る」となっており、「受(vedana)の滅尽」が入っていない。さらに根本説一切有部毘奈耶破僧事のチベット訳^⑥においても「業尽↓苦尽↓苦辺を得る」という離繫派の業説が関説され、漢訳と一致するしたがって佛教に伝えられているこの常套語には、パーリの原始經典に見られる「業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅」とともに、漢訳阿含経及び根本説一切有部毘奈耶破僧事のチベット訳に伝える「業尽↓苦尽↓苦辺を得る」の二種があったことになる。もちろん前者と後者との相違は「受滅」が入っているか、いないかの違いである。

それではこの常套語は古層に属するジャイナ教の原始聖典に見られるであろうか。

「正しく道に随順する人によりて、業の摂取(ayāna)が阻止され、また以前に結ばれたる(業の)遮棄されたるときに、苦は滅尽にいたる」^⑦

「業は生死の原因であり、生死は苦である」^⑧という記述も反対にすれば業滅↓苦滅になると理解してもよいであろう。他方パーリ經典の「業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅」になると、充分にそれを裏づけるジャイナの資料が見出されない。しかし、

「心の受に無関心である人は苦悩から離れている」^⑨

という資料は苦滅→受滅と同じ意味に理解できよう。受とは感受性であり、世俗的な生活の根底にあって働いているが、解脱するためにはそれをも滅しなければならぬ。だから業滅→苦滅→受滅→一切苦滅なる解脱に至る過程が成立つのである。ところで業によって苦が滅し、受が滅し、最後に一切苦が滅するところの場合、業が、要するに苦の原因であり、受の原因であり、一切苦の原因であることになる。さらに業が苦も受も一切苦をも含むことになり、苦を感じしめるのも業であり、受を成立させるのも業であり、一切苦を感じしめるのも業となる。ジャイナ教の伝統的な業の解釈によれば、業には jñānavarāṇiṃ, darsanavarāṇiṃ, mohaniya, antarāya なるジークヴァの本性を害するもの、及び vedaniya, āyusya, nāma, gotra なるジークヴァの本性を害さないものがあつた。このような業の分類は、要するに苦を感じしめる業、受を感じしめる業、一切苦を感じしめる業を八つに分類したことになる。そこにはわれわれが考察している受 (vedana) と関係づけられる vedaniya も含まれている。vedaniya とは、快、不快を感じしめる業である。したがって、パーリのニカーヤに見られる「業滅→苦滅→受滅→一切苦滅」も、現存する古層に属するジャイナ教聖典には、それを裏づける満足な資料は見出されないけれども、ジャイナ教の業論から充分に論証できうる。したがって、「業滅→苦滅→受滅→一切苦滅」と「業尽→苦尽→苦辺を得る」の両説ともニガンタ・ナータプッタに帰してよいであろう。

ところで、相应部三五・一四五に「業の滅尽」「業の滅尽に達するの道」を説く經典があるが、佛教においても「業の滅尽」を説くのであろうか。まずその教説を見ることにしよう。

「比丘等よ、新古の業 (navapurāṇaṃ kammaṃ)、業の滅尽 (kamma-nirodha)、業の滅尽に達するの道 (kamma-nirodhagāminī paṭipada) を説こう。それを聴け、よく思惟せよ、それを語ろう。比丘等よ、何を古

い業とするか。眼は作為されたる (abhisankhata) 、意思せられたる (abhisancetayita) 、感受せらるべき (vedanīya) 、古い業 (purāṇa-kamma) と見るべきである。耳は……鼻は……舌は……身は……意は作為されたる、意思せられたる、感受せらるべき、古い業と見るべきである。比丘等よ、これを古い業という。

比丘等よ、何をか新しい業とするか。比丘等よ、如何なる業にても今身にて語にて意にて作すところのもの比丘等よ、これを新しい業という。

比丘等よ。何を業の滅尽とするか。比丘等よ、何ものにも身業語業意業の滅尽よりして解脱に触るれば、比丘等よ、それは業の滅尽といわれる。

比丘等よ、何を業の滅尽に達するの道とするか。これが聖なる八支の道なる、即ち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。^⑩

この經典の説くところは、ジャイナ教の業を論じてきたわれわれにとって、はなはだ奇怪に思われる。なぜならば、「古い業」「新しい業」というジャイナ教の業にのみ用いられる用語が出ている。しかも、現在ある六根が古業であるとは、前世の業の結果としてのものであり、ジャイナ教の古業の意味をそのまま用いている。「新しい業」とは、今身口意によって作すところのものであり、ジャイナ教の新業とは一致しないが、次の「身業語業意業等の滅尽よりして解脱に触るれば、……それは業の滅尽」なる記述は、業の滅によって解脱に到ると説くジャイナ教の業説に順じた理解をしなければならない。最後にその「業の滅尽に達するの道」とは八聖道であると説いてはいけるけれども、理解に苦しむ説き方である。ジャイナ教の業の思想がその背後に感じられない。なぜならば八聖道を「解脱」とか「涅槃」に入れかえれば、全くジャイナ教の教説であると見ることができる。それでは何故に

このような教説が佛説として伝えられているのであろうか。^⑩

よく知られているように、マハーヴィーラはヴァイシャリー(Vaishālī)の近くのクンダプーラ(Kundapura)に生れ長い苦行の後大悟を開いてからマガダ(Magadha)のラージャグリハ(Rājagṛha, Rājagṛha)からコーサラ(Kosala)のシュラーヴァステイー(Śrāvastī, Sāvasthī)そしてアンガ(Aṅga)のチャンパ(Campa)からヴァンサ(Vaṃsa)のカウシャーンビー(Kauśāmbī, Kosambī)に布教の旅を続けたが、とくにラージャグリハは関係深い場所である。一方ブッダ釈尊は、マハーヴィーラよりも布教範囲が広く及んでいるけれども、とくに関係深かった所は、シュラーヴァステイー、ラージャグリハ、ヴァイシャリーなどであり、マハーヴィーラの場合と全く一致している。したがって、ジャイナ教と佛教とは、地理的な面ばかりでなく、教義においても、交渉関係があったことは否定することができない。原始佛教経典においてニガンタ・ナータップに言及する箇所が数多く見出されるばかりでなく、ジャイナ教の原始聖典においても佛教の教義に数多く触れるところがある。

ところで今問題としている相応部三五・一四五において説かれている教義が、仮面をかぶったジャイナ教の業説である理由として、次のように考えるべきであろう。釈尊は、ジャイナ教徒あるいはマハーヴィーラの布教した地方で説法することが多くあったので、それらの地方の人々のために、対機説法として、具体性をもたすために、最初にジャイナ教の業の用法をそのまま用いて説法し、最後に八聖道に導き入れるためであった。いずれにしても、このような教説が相応部に入れられて伝えられたということは、注目すべきことである。このような観点から理解すれば、ジャイナ教の業説はかなり佛教徒に知られていたことになり、阿含ニカーヤに説かれているニガンタ・ナータプッタの業説は信憑性があると考えるてもよからう。

(3)

阿含ニカーヤに見られるニガンタ・ナータプッタの業説の中の、〔3〕樂、苦、不苦不樂を感受するのは、すべては前に作られたものを因とする（宿作因説）、について検討せねばならない。佛教の伝えるジャイナ教の宿作因説を裏づけるそのまゝの記述はないけれども、次に引用するジャイナ教聖典はその説と符合する。

「業がなさるるそのまゝの結果が享受され、（それは）種々異なる行動によりて出されたる苦或いは樂なり。」^⑫
 「自己のなせる諸々の業の結果を自我は享くるなり。その故に自己のために惡に關して避くべし。」^⑬

宿作因説とは、過去世になした行為の結果によって、現在の苦樂が決定されるという運命論であるが、釈尊はそれを、自在天の化作を因とする尊祐説と、苦樂の決定は無因無緣であるとする無因無緣説とともに非難し、それに反対する釈尊の立場を明らかにしている。そこで、宿作因説に対する釈尊の論点を引用しよう。

「前世に因を作りしが故に當に殺生すべし、前世に因を作りしが故に當に与へられざるを取るべし、前世に因を作りしが故に當に非梵行を行ふべし、前世に因を作りしが故に當に妄語すべし、前世に因を作りしが故に當に離間語すべし、前世に因を作りしが故に當に麤惡語すべし、前世に因を作りしが故に當に雜穢語すべし、前世に因を作りしが故に當に貪欲者なるべし、前世に因を作りしが故に當に瞋恚者なるべし、前世に因を造りしが故に當に邪見者なるべし、比丘等よ、また前世の所作を堅実なりと執する人々には、これは作さるべし、これは作さるべからずという意欲 (chanda) もなく、また努力 (vāyāma) もなし。しかるにかくの如く作さるべきと、作さるべからざるとが実に確に知られざるときに、失念して護るところなく住する人々には、自ら沙門なりと稱することの理由はない。」^⑭

すなわち積尊の非難によれば、宿作因説においては、「これは作さるべからず、これは作さるべし」という人間の意欲も努力も認められないことになると思う。ジャイナ教の立場からすれば、それは必ずしも妥当とはいえない。ジャイナ教でも意欲や努力を次のように許していると見るべきである。

「汝の有するこの悪業を發展せしむるもの (papa-kamma-pavaddhana) を断ち終りて、最高のすぐれた目的を取るもの (uttam'atthavar'aggahī) となりて、努力するために (viriyattae) (人は) 出家すべし。」¹⁵⁾

「自己は自己によりて作られたる諸業の果を享く。故に自己のために惡に關して (atāra) 避くべし。」¹⁶⁾

「輪廻における苦の根本は、先になされた悪業なり。悪業の滅のために、比丘は正しく出家すべし。」¹⁷⁾

ジャイナ教によれば、行為の余勢とでもいうべき業が、行為者の上に残る形を説明し、行為の結果ジークヴァに微細な業物質が附着するとなした。したがって、過去になした行為は、直接今の苦樂を決定するのではなく、ジークヴァに附着した業によって、間接的に行為者の上に苦樂の影響を与える。だからその業を自分の意志によって抑えたり、減したりする道をとることも可能である。業は輪廻転生の因であり、苦の原因である。それを減しなければならぬ。積尊によって宿作因説として非難されるように、マハーヴィーラの業説は運命論に解釈できるが、その業説をそのまま受け入れた生き方を勧めるのではなく、業の滅に向う宗教生活に導くために業を問題とするのである。したがって宿作因説を非難する積尊の立場は、苦の因である業そのものに限って論じたことになり、その滅を説くマハーヴィーラの業に対する態度を無視した非難であると言わなければならない。古業を如何にして滅するか、さらに未來に新業が漏入するのを如何にして防ぐかを教えることが、業論を展開する主なる目的である。

(4) [4] 過去の行為の結果生じた悪業を苦行によって滅し、未来に悪業を生じさせないために身口意による防護をする。

これは、原始佛教經典の伝えるニガタン・ナータブッタの業説のうちの一つであり、これについて検討しよう。今までに、過去の行為の結果生じた古業を滅するためには苦行によることを述べたが、ここで問題とするのは、未来に漏入する新業を防ぐ方法である。「身口意によって防護すべきである」というのが、新業がジークヴァに附着させない方法である。それは次のジャイナ教の古層聖典と全く一致する。

「愚かならずして、智と苦行と自制 (samyama) とに正見を有し、苦行によりて古昔の悪 (業) を振り捨て、意と語と身とに於いてよく守られたるは、比丘なり。」^⑮

「身と語とまた意とによりて、三護によりて守られ、汝、勝者 (jina) の語に住すべし。」^⑯

以上によって、釈尊の言及する新業防護の仕方が明らかになったが、ここでジャイナ教で用いる身口意について触れておきたい。佛教では身口意の三業と言うが、ジャイナ教では業 (karma) ではなく、yoga (joga) と呼ぶ。すなわち、

「身 (kaya) と語 (vac) と意 (manas) のはたらき (karma) は行為 (yoga) である。」^⑰

と説明されている。そしてジャイナ教特有の意味に用い、ジークヴァが身口意を動かして業物質を漏入する作用をいう。さらに後の註釈家は、ヨーガをジークヴァの振動 (parispanda) であると解釈している。^⑱ 何故にこのような特殊な術語を使用するに到ったのであろうか。

ジャイナ教の古層聖典では、yoga (yoga) には、だいたい次のような用法が見出される。[A] 行為一般に用いる場合——棘を引き抜く yoga (行為)^②、非難すべき yoga (行為)、行動 (yoga)、諸ヨーガ (身口意の活動) を滅して最高位に入る、行為 (yoga) の捨離^③——、[B] 精神統一としての所謂ヨーガ——瑜伽 (yoga) に結ばれたる賢者の諸の悪業は滅せられる——、[C] Aの意味か [B] の意味か明瞭に区別できない場合——警戒せよ。眠る勿れ。放逸なる汝の法行に於いて、抑制の yoga (行為? 瑜伽?) に於いて、盜賊どもが賤しき行為をなさざらんことを——、[D] 結合の意味の場合——(体内の) 火が身と食とを結合 (yoga, yoga) によって——

ここにおいて問題となるのは [A] の意味であるが、古典サンスクリットにおいても、yoga は「活動、努力、奮励」の意味に用いているから、^④ [A] は必ずしも特殊な用法ではない。パーリ語にもこの用法が見出される。^⑤ したがって、初期のジャイナ教では身口意の yoga とは、一般的に身口意の行為の意味に用いられたと考えられる。karma が行為の結果としてジークヴァに附着する業物質を意味することになったので、それと区別するために身口意には yoga の語が採用されたのであろう。さらに、ジャイナ教では、身口意の行為とジークヴァの関係を結びつけて、身口意をはたらかす作用がジークヴァの側にあると解釈されると、ヨーガは、ジークヴァが身口意を動かす作用を意味することになり、ジャイナ教独特の意味が加えられる。さらに、yoga を saṁśāra vyāpaka (心的色彩のある力) であると定義されるようになり、おのずから後の註釈家がヨーガをジークヴァの振動 (parispanda) であると解釈した理由が明らかになる。しかしながら、われわれが問題としてきたマハーヴィーラの場合には、ヨーガには、まだそのような特殊な意味が加えられてはいないはずである。

原始佛教經典とジャイナ教の古層聖典とが一致して、未来に悪業を生じさせないために身口意による防護を説い

ていたから、ジャイナ教の伝統的業説におけるように、ジークヴァが業物質を引入れる原因として身口意のヨーガが考えられる。しかし阿含ニカーヤにおけるジャイナ教の業に関する言及にも、ジャイナ教の古層聖典にも、身口意のヨーガによってジークヴァが業物質を引寄せるとは、まだ充分に説かれていない。もちろん

「自制せずして歩みつゝ……立ちつゝ……坐しつゝ……臥しつゝ……食しつゝ……語りつゝ、人は、生類を害し、悪業を結ぶ。」^②

のように、殺生によって悪業を結ぶと説いているが、身口意のヨーガによるとは明確に言っていない。それに対し「煩惱 (kaṣāya) とまた結とは業の執持の原因なり。」^③

のように、kaṣāya によって業を引き寄せることを説いている。伝統的業説では、yoga と kaṣāya によってジークヴァが業物質を引寄せると説いているが、ここではまだその前段階であり、殺生等の行為とか煩惱が業を結ぶ原因であると説いていたにすぎない。その後殺生等の悪業が身口意のヨーガ (行為) になり、さらにそのヨーガが、ジークヴァとの必然的連結が明らかにされると、ジャイナ教独自の伝統的解釈が成立し、身口意を動かすジークヴァの作用とか、ジークヴァの振動であると解されることになる。

(5)

以上が原始佛教經典に伝えられるニガンタ・ナータプッタの業説であるが、その他マハーヴィーラの業説に言及する箇所が二三見出される。例えば、中部五六ウパーリ・スッタナタ (優波離經) には次のように伝えている。

「離繫派のナータプッタは悪業 (pāpaṇi kammaṇi) の成就、悪業の展開に関して、幾何の業を施設するや。」

「離繫派のナータプッタは『業 (kamma) なり、業なり』と施設するを常とせず。卿瞿曇よ、離繫派のナータプッタは、『罰 (danda) なり、罰なり』と施設するを常とす」……

「離繫派のナータプッタは惡業の成就、惡業の展開に関して、三罰を施設す。即ち身罰、口罰、意罰なり」

……「……惡業の成就、惡業の展開して、身罰最も重し (mahā-sāvajātara) と説く。……」^④

すなわち「惡業」に対して「業」とは云わず、「罰 (danda)」と言う語を用いている。これは、すでにわれわれが述べてきたように、ジャイナ教では、ジューヴァに附着した業物質を「業」という語で表わしているため、当然のことである。ジャイナ教の古層聖典においても danda という語は「罰」という意味において、非常によく用いられている^⑤。さらに身罰が最も重いということに関しては、すでにヤコービが指摘しているように、Sūtrakriāṅga の中にそれに一致する記述がなされている。すなわち、知能や意識が発達していない人の場合、身口意の行為を意識しないけれども、罪を犯すこともあるし、無意識に罪を犯すことのあることを述べている^⑦。さらにこれに関連して、釈尊の業説が動機とか意図にかかわって解釈されていることに對し、同じ Sūtrakriāṅga において、厳しく非難している。その要旨を記せば次の如くである。

「もし一人のムレッチャ族が、穀物倉を本当の人間であると思って焼串をさしたり、瓢箪を本当の赤児であると思って焼串にさして焼くならば、佛教徒によれば、彼は殺人の罪があるだろう。

もし一人のムレッチャ族が、本当の人間を穀物倉の断片、あるいは赤児を瓢箪と間違えて焼串をさし、焼いたならば、佛教徒によれば、彼は殺人の罪はない。

もし人間や赤児を、それによく似たものと思って火の上にのせて焼いたならば、それは佛教徒に適當な食事

である。^③」

このように、自分の行為の善悪を、人の意図にかかわっているという佛教徒の主張が非難されている。いづれにしろ、身業最も重しとする原始佛典の伝えるジャイナ教の業説が、ジャイナ教聖典においても記されていることが明らかになった。

もう一つ、業とその果報に関する記述をニカーヤの中から引用しよう。

「大徳よ、ニガンタ・ナータプッタは弟子等のために是の如く法を説く、『誰人にも生命を破却する (paṇam atimāpeti) ものは総て離去処・地獄に墮つ、誰人にも与へられざるものを取る (adinnam ādiyati) ものは総て離去処、地獄に墮つ、誰人にも諸欲に於て邪まに行う (kāmesu nicchacarati) ものは総て離去処、地獄に墮つ、誰人にも妄りて語る (musā bhanati) ものは総て離去処、地獄に墮つ。凡そ住する所多ければ、その多きに随つて導き去らる』と、大徳よ、ニガンタ・ナータプッタは是の如く弟子等のために法を説く、と。聚落主(アシバンダカブッタ)よ、ニガンタ・ナータプッタの教の如く『凡そ住する所多ければ、その多きに随いて導き去らる』と若し是の如くならば、何人も離去処・地獄に墮つるものなかるべし。^④」

これは、ジャイナ教の五大誓 (mahāvratā) を破った場合に、その果報として地獄に墮つることを説いている。五大誓を破ることによってその果報を得ることは、ジャイナ教聖典に一般的に説かれている。五大誓とは、不殺生、真実語、不盗、不姪、無所有であるが、今引用した相應部經典に言う「凡そ住する所多ければ、その多きに随いて導き去らる (yam bahulaṃ yam bahulaṃ viharati tena tena niyyati)」^⑤が、はたしてジャイナ教の「無所有を破ること」に一致するであろうか。無所有とは、出家ならばすべての所有を捨てることであり、在家ならば、自己

の所有に満足し、それ以上欲求しないことである。「所有 (paṇigraha) とは欲求 (murcha) なり」^④と定義されているように、物を所有しようとする欲望である。したがって、「凡そ住する所云々」なる文章を「凡そ住すること」を多く欲すれば欲するほど、その多きにしたがって導き去らる」と読めば、ジャイナ教の所有と関係して理解できるよう。佛教の五戒では最後の無所有が不飲酒になっている。したがって、釈尊は無所有を認めないので、無所有を破ることによって、「何人も離去処・地獄に墮つるものなかるべし」と非難している。

以上、阿含ニカーヤに説かれているニガンタ・ナータプッタの業説をとりあげ、その業説はすべて、ジャイナ教の古層聖典に説く業説と一致することが明らかになった。したがって、原始佛教とジャイナ教の古層聖典との両者に一致する業説は古い部分、すなわちマハーヴィーラの業説に近いと考えてもよからう。業に対する根本的な概念には相違はないが、形式的な分類を重視する伝統的業説に比較すると、素朴ではあるが、宗教的実践と結びついて生きている業説を感じることができる。

註

- ① Dasaveyaliya III, 15 松濤誠廉「ダサヴェーヤーリヤ・スッタ」(大正大学研究紀要第五十三輯) 参照。
- ② Uttarādhyayana XXIX, 27.
- ③ ibid. XXIX, 37.
- ④ 雑阿含第二十一(大二・一四七c)。
- ⑤ 中阿含第十九(大一・一四二c)。
- ⑥ 根本説一切有部毘奈耶破僧事のチベット訳に離繫派の業説が説かれていることについて、高木紳元氏の論文「パーリ沙門

果経における離繫派の学説」(密教文化第一〇四卷、九〇〜九一頁)において指摘されている。氏の論文は、パーリ沙門果經にあらわれている離繫派の四種禁戒の内容をめぐる問題を論及したものである。直接ジャイナ教の業論をとりあげたものではないが、資料等の点で啓発されるところがあった。

⑦ *Isibhāsīyāṇ* IX, 22.

⑧ *Uttarādhyāyana* XXXII, 7.

⑨ *ibid.* XXXII, 87-99.

⑩ *SN* 35, 145 (IV, p. 132-133). 相当する漢訳なし。

⑪ 「眼・耳・鼻・舌・身・意は為作せられたる、意思せられたる、感受せらるべき、古業であるとするべきである」(*SN* 35, 145)、「この身体 (*kāya*) は為作せられたる意思せられたる感受せられたる古業であるとするべきである」(*SN* 12, 37, 雜阿含一・二・三) に対して、舟橋一哉博士は次のように述べておられる。「これらの經典に言ふ所を文字通りに理解すれば、これはいかにも、善那教教的であつて、業を物質的にしか考へてゐない事になるが、これは恐らく漢訳が理解してゐるやうに、六根とか身とか言はれるものは、前世の業の結果であると見たものであつて、そこには輪廻の思想が前提となつてゐるのであつて、やうとすれば、これは佛陀の業説の純粹な形ではない。」「業の研究」三〇頁。

⑫ *Isibhāsīyāṇ* XXX, 3.

⑬ *ibid.* XLV, 10.

⑭ *AN* 3, 61 (I, p. 174).

⑮ *Isibhāsīyāṇ* III, 6.

⑯ *ibid.* XV, 17.

⑰ *ibid.* XV, 2.

⑱ *Dasaveyaliya* X, 7.

- ①⁹ ibid. XI, 17.
- ②⁰ Tattvārthadhigamasūtra VI, 1.
- ③¹ W. Schubring: Die Lehre der jainas, S. 113 f. 金倉田照「印度精神文化の研究」(岩波書店) 一六一頁。
- ④² Isibhāṣiyāṇi XVII, 5.
- ⑤³ ibid. XVII, 7.
- ⑥⁴ ibid. XVII, 3.
- ⑦⁵ Dasaveyāliya IV, 23, 「寂しきことなりてなりて」三種の行動の関連にありて (tīvireṇa karaṇa-joeṇa) (ibid. VI, 27; 30; 41: 44), 「三種 (samādhi) の状態 (yoga) にありて」(IX, 1, 16).
- ⑧⁶ Uttarādhyayana XXIX, 37.
- ⑨⁷ Isibhāṣiyāṇi IX, 15.
- ⑩⁸ ibid. XXXV, 18.
- ⑪⁹ ibid. XVI, 3. 今の場合、ミーガは行為の意味にとられるので、多少あいまいである。
- ⑫⁰ A Sanskrit-English Dictionary ed. by Monier-Williams (Oxford), 'yoga' の項目参照。
- ⑬¹ āśaṇānam khayāya yoga karaṇīya (AN II, 93). 涅槃を意味する yoga-kṣema (安穩・寂靜) の場合、yoga は「行
業」の義、kṣema は「安寧」の義。
- ⑭² Dasaveyāliya IV, 1-6.
- ⑮³ Isibhāṣiyāṇi IX, 5.
- ⑯⁴ MN I, p. 372, 中區、但し三三三 (大イ、六二二c)。
- ⑰⁵ Āyārāṇga (Ācār) I, 1. 4, Uttarādhyayana XXXI, 4 etc.
- ⑱⁶ Sacred Books of the East Vol. XLV Jaina Sūtras Part II, Introduction xvii.

- ③⑦ Sūtrakṛitāṅga II, 4, 1 ff.
 ③⑧ ibid. II, 6, 26-28. 原文の要約である。
 ③⑨ SN 42, 8 (IV, p. 317).
 ④⑩ 「以多行故則將至彼」(雜阿含三二卷二二經)、「隨作時多、必墮地獄」(別訳雜阿含七卷一〇經)。
 ④⑪ Tattvārthādhigamasūtra VI, 12.

四

マハーヴィーラの業説を明らかにするための方法論として、彼と時代的、地理的に最も関係深かった釈尊が言及するところのニガンタ・ナータプッタの業説をとりあげ、それと一致する説がジャイナ教の古層聖典に説かれている場合、その業説がマハーヴィーラに帰すると結論してきた。もちろん原始佛教経典に伝えられない部分もあろうが、新古の資料が混在するジャイナ教聖典において、少くとも原始佛教経典とジャイナ教の古層聖典とに共通する部分は、間違いなくマハーヴィーラの業説に近いはずである。したがって、今迄行ってきたわれわれの作業によって、マハーヴィーラの業説の一部が採り出されたことになる。

ここにマハーヴィーラの業説の一部、と言ったのは、その中に他の人の説も含まれているからである。周知の如く、マハーヴィーラはジャイナ教の第二十四祖であり、第一祖 Rishabha から第二十三祖 パールシュヴァ (Pārśva, Pāśa) までの間に二十三人の祖がいる。もちろんパールシュヴァ以外はすべて歴史的人物であるとは考えられない。パールシュヴァは、マハーヴィーラより二百五十年前の人物であるとされているが、パールシュヴァの一派がマハ

ーヴィーラの時代にも存在したと言われているし、マハーヴィーラ自身パールシュヴァの学説をかなり受継いでいるわけである。したがって、われわれの採り出したマハーヴィーラの業説の中にもパールシュヴァの業説が含まれているはずである。そこで、どこまでがパールシュヴァから受継いだ業説であり、マハーヴィーラ自身の独創説はどこにあるかを区別することによって、初めてマハーヴィーラの業説が明らかになる。

幸い、パールシュヴァの業説を伝える資料が、ジャイナ教の古層聖典に属する *Isibhasiyāṃ* (31) に伝えられているので、それを引用しよう。

「(a)上昇するものが諸々の命 (*jīva*) なり。下降するものが諸々の物質 (*poggala*) なり。(b) 諸々の命 (*jīva*) は業の力 (*kamma-ppabhava*) とし、物質は (本質にそなわる) 変化 (*pariṇāma*) を力 (*pabhava*) とす。(c) 業 (*kamma*) を得て諸々の命 (*jīva*) には果の異熟 (*phala-vivakka*) あり。(本質にそなわる) 変化を得て諸々の物質には果の異熟あり。……

(a) 諸々の命 (*jīva*) は上昇するもの (*uddhaṇ-gāmi*) にして、諸々の物質 (*poggala*) は下降するもの (*adha-gāmi*) なり。(b) (c) 悪業の行為によりて (*pāva-kamma-kaḍḍhaṇam*) 諸々の命には変化 (*pariṇāma*) あり、悪業の行為によりて諸々の物質の変化あり。(d) 如何なる時にも生類は不苦をなさざりき、と。(e) 諸々の命は自己によりて作られたるものなり。為しつゝ、為しつゝ苦悩を感じ。即ち、殺生により (*pañātivāḍaṇam*) 《乃至》所得により (*Pariggaheṇam*) (苦悩を感じ)。実にこの覺らざる、その業の護られざる (*asaṃvudakamma'ante*) 四の戒 (*caṇḍiṇa*) (＝四つの *mahāvratā*) を行う離繫者は八種の業縛をなす。(*añṭhaviṇaṇ kamma-gaṇṭhin paḍaṇeti*) 彼はまた、四つの位によりて異熟に到る。即ち、諸々の地獄により、諸々の畜生により、諸々の人

間により、諸々の天により。諸々の命 (jiva) は自己によりて作られたるものにして、他によりて作られたるものに非ず、為しつゝ、為しつゝ苦悩を感ず。即ち、不殺生を避けることにより、《乃至》所得を避けることにより。実にこの覚れる人にして業を護り四つの戒 (caujama) (《四つの mahavata》) を行なう離繫者は八種の業縛を作らず。彼はまた、四種の位によりて異熟に到らず。……」^②

その他、世間はジューヴァとアジューヴァ (ajiva || 非命) からなること、四種の世間等も、すでにパールシュヴァが説いたことになっている。ところで彼の業説は体系的に組織されておらず、整理することは困難であるが、だいた次のようにまとめることができる。

(a) ジューヴァは上昇するもの、物質は下降するもの。(b) 悪業なる行為によってジューヴァに変化がある。悪業の行為によって物質の変化がある。(c) 殺生乃至所得により業縛をうける。(d) 八種の業縛。(e) 業 (カルマ) を行為の意味にも用いている。

まず (a) の点に関しては、昇天の思想がその背景になっている。われわれがまとめたマハーヴィーラの業論には昇天思想はなく、苦の因たる業の滅がそのまま解脱であるとする。マハーヴィーラの業論は、この点において彼以前のパールシュヴァの業論と区別できる。次に (b) (c) は、マハーヴィーラの業説の中に流れている。(d) の八種の業縛についてであるが、*Naya: VI* によると、ジューヴァは殺生、妄語乃至邪見により、その重量のため地獄の底に達し、八種の業を除くとき、上昇して世界絶頂に安立すると、マハーヴィーラが説法したとなっているが、これは明らかにパールシュヴァの説であり、マハーヴィーラの業説と区別すべきである。(e) カルマの意味は明確になっていない。行為の意味にも、業物質の意味にも用いられているようである。パールシュヴァは、業を新業古業に分ける解釈を

なしていない。したがって業を減する方法にも言及していない。身口意のヨーガという言葉も用いられていない。

パールシュヴァの業説は昇天思想と結びついて説かれているが、マハーヴィーラの場合は、どのように理解すべきであろうか。確かにジャイナ教聖典には、マハーヴィーラの業説にも昇天思想が現われているけれども、マハーヴィーラの場合、業を減したそのままの境地が解脱であると考えるべきである。すなわち、「過去の行為の結果生じた古業を苦行によって減し、未来に新業を生じさせないために身口意による防護をする。」というマハーヴィーラの場合、苦行によって古業を振り捨て、身口意においてよく護られている状態が解脱である。それは、「業減↓苦減↓受減↓一切苦減↓〔解脱〕」とも言われるように、一切苦を減した至福の境地である。したがって、われわれが採り出したマハーヴィーラの業説は昇天思想と結びつけるべきではなからう。

以上、パールシュヴァの業説とマハーヴィーラのそれとを比較することによって明らかになったことは、輪廻思想に結びついた業そのものの思想は受継いでいるけれども、パールシュヴァの業説とマハーヴィーラのそれとの間にはかなり隔りがある。われわれが集めたマハーヴィーラの業説の大部分がマハーヴィーラの説に帰するといえるマハーヴィーラは、輪廻転生の因として業をとらえ、行為の余勢がどのように次の生存を決定していくかをきめる原因を説明して、漏入によって業物質がジヴァに入るとなした。マハーヴィーラがこのように鋭く業に目を注いだのは、苦の原因としての業を減する道を説くためである。

註① S. B. Deo: History of Jaina Monachism (Poona) p. 62~63. Bhagavati V. 9.

② Isibhasiyāṇ. XXXI.